

なくそう
減らそう
糖尿病

第11部

在宅療養を支える ⑤

一本の電話が患者を救うことがある。

茨城県つくばみらい市の会社

社長、新谷修一

さん(62)は10年

前に糖尿病を発

症した。当初は症状も軽く、近隣の川井クリニック(つくば市)

治療再開 電話で促す

で食事指導などを受け、血糖値が改善。気が緩み、仕事の忙しさも重なり、通院をやめた。一度足が遠のくと、クリニックに行きづらくなった。06年には、体の不調を覚えた。しばらくして、クリニックの片貝貞江看護師から「最近いらっしゃっ

多忙」を挙げ、15%が「面倒になった」と答えた。3人に1人は電話をきっかけに再来院した。片貝さんは「電話を待っていたという人もいる。どこの医療機関でも構わないので治療を続けてほしいと伝えている」と話す。

07年の国民健康
・栄養調査による
と、糖尿病の患者

ていませんが、具合はいかがですか」と自宅に電話がかかってきた。「調子が悪い」と伝え、すぐに予約を入れてもらった。新谷さんは「救いの電話だった。電話がなかったら、受診せずに重症化していたかもしれない」と振り返る。

は約890万人だが、治療を受けているのは56%だ。厚生労働省は地域の医師会の協力を得て、電話などで受診を促したり、食事や運動療法の指導を行う取り組みを始めた。地道に活動する人を支えていくことが大切だ。

【下桐実雅子、写真も】
〓おわり



治療を続けてもらったため患者宅に電話する片貝貞江看護師(茨城県つくば市の川井クリニックで

クリニックでは97年から、3〜4カ月来ない患者に電話を入れている。川井絃一院長は「声を聞くと、来院しない理由が分かる。転院していることもある」と説明する。

再来院した患者に治療中断の理由を聞くと、半数が「仕事で



イラストは、過食を警告するシンボルマークの「エンゼルピッグ」